

講 話

朝鮮地名の考説 (二)

中 村 新 太 郎

緒 言

我が國の地理學界は最近まで隆昌であるとは云へなかつた。尤も明治十一年頃から十七年頃までは我が國に於ける地理學の旺盛時代で、内務省には地理局があつたし、外國の事情が國民によく判つて來たし、地理學を専攻した人士も少からずあつた。我等は今でも其頃計算した日本の面積を使つてゐ、當時或る府縣で測量出版された銅鑄の地圖には大字の境界が現はされて居たにも拘らず、其後かゝる地圖は出版されず、加之今では此の時代の地圖を手に入れることはさて置き見ることでさへ容易でないと云ふ次第である。

地理學が學問でない様に思はれた明治の後半を過ぎ大正に這入つても十年餘りは實世界からは遠く離れた學問で小學や中學の教課としてしか人はこの面白く且つ實益のある學問を認めなかつた。地理學上攻究すべき問題の多いのにも係らず地理學に關する業績は五萬分一、二萬分一等の陸地測

量部の地形圖及水路部の海圖以外には甚だ寥々たる有様である。歴史地理の方面では前に柳岡氏の日本地理志料があり後には吉田氏の日本地名辭書があつたが純地理學としては二三の地形に關する論文を擧げ得るに過ぎなく、地誌としては佐藤、山崎兩先生の大日本地誌がある許りで、要領を得た日本内部の記事を見るべくラインの日本やチャンバーレン及メーンソンの日本案内を繙くのが捷徑である状態である。

大正に入つてから地形學に興味を持たれる先覺者が續々として現はれて來て、地理學中日本の地形に關しては近年立派な著述や論文が公にされるのは甚だ喜ばしいことである。地圖があり、地形學が一般民衆の學問となり且つ歴史地理の根柢たるべき良著があるとすれば次に興らねばならぬ地理學上の一分料は地名考説ナイメンクンデであらねばならぬ。我が國地形學の俊髦辻村氏は最近（地理學評論第一卷第二號二二頁）日本に於ても地名の説明によつて多くの地理的事實が明かにされるに相違なく、地名考説を有意義に利用することは快心な仕事であると述べられて居るのは空谷に跽音を聽くの趣があつて同感に堪へない。

日本地名の考説としては史學的には古くから著述もあつたが、國學者の取扱つたものは大日本國號考と云つた風のもので郷名以上の大地名であつた。稀れには馬琴の様に江戸四近の割合に小さな地名を考證したものもあつたが、物數寄の圈外に出たものとは思へない。吉田氏の地名辭書に到つ

て地名の史的考證を大成したものと云へるが地理學적であるとは云へない。

明治の中葉からチェンバーレンやバチエラーがアイヌ語で日本の地名の幾らかを解釋せんと試みたことは我等の好奇心を唆つたのであつたが、眞摯な後繼者が現はれなかつた。一方には宮崎博士の如く日本地名の極少數を朝鮮語で解釋しやうと試みた人士もあつた。然し之を大成する域には達せなんだ様である。明治の末年に柳田國男氏は『歴史地理』誌に幾度か日本地名の考説を寄せられた。其一部は正に地理學적であつたが民俗學的の色の濃いものであつた。之は唯一の日本地名考説と謂つてよい著述であるが、成書でなくて其後一般に流布されないのを遺憾とする。

日本の文物は複雑であつて其の地名考説は新しい研究域であると共に之を大成するのは容易ならぬ事業である。然しいつまでも此儘にこの興味と價值とのある地理學上の一方面を未墾の荒蕪地として殘して置くことは殘念に堪へない。と云つて之に手を染め出しても捗々しくは進めないと思へる。日本地名考説の魁をなすべく内地よりも文物の簡樸である朝鮮を祖上にのぼすのは幾分か容易な仕事である氣もするので、茲に十五年前から少しづつ準備して置いた朝鮮地名の考説を述べやうとするのである。

日本内地の事柄に對しては我々は一つ一つに新しい刺激も感興も感じないのであるが新附の國土に對しては第一に其が自分達の傳統的な環境とかけ離れた所にあるといふ點で強い感じを享けるの

である。畢竟異境的であるといふことが攻究の動機ともなり、興味を喚び起す源ともなるのである。又他方から考へると五萬分一地形圖でさへ、より速に完成された朝鮮に關し日本のよりも先きに其地名考説が説かれることは寧ろ自然の勢であるとも強辨される。英國でさへ地名に關した著述にはゲーリック語のスコットランドやウエリッシュの話されるウエールスやに關したものが多いのもこゝに云つたと同じ事情から起ることゝ思はれる。兎も角後來日本地名の考説が地學者によつて研鑽される様になるのを望む心から講話者には親しみのある朝鮮の地名に就いて談つて見たいまでである。

一、概 説

朝鮮の地名は屢々改稱された。古くは高勾麗コウリョの地名は新羅になつてまるで改められた。高麗や李朝にも改廢が多く、併合間際まで村の名(里洞名)は變更されて居た。併合後土地調査に伴はれて郡名と面名との一部が改められて現在では時に變更されることはあつても略定まつたものになつた。併し現在に於て或る一集落に用ひらるゝ名稱は公稱の外に幾つかの異名がある處もあつて數箇の名稱を持つ所がある。嘗て通過したことのある平安北道昌城郡の南境に近い長城門と俗稱される小部落は今では陽徳洞に屬するが、大正元年頃には新德里とも新得站とも呼ばれた。そんな風で地形圖上に記されて居る集落名が實際には用ひられて居ない場合が少なくない。五萬分一地形圖には新し

き呼稱の地名を書いて右傍の假名で書かれた地名は俗稱となつて居る古い地名を書いたものがある。昨年平安南道中和郡祥原の東方一里の小部落に『白楊洞』と五萬分一圖に書かれた處を通つた。白楊洞は如何に見てもサスルコルとは讀めない。之はもと士瑟洞と呼び今でも一般にサスルコルとは云ふが白楊洞に改名されたのであつた。又江原道春川の北一里半で出會つた例は古い五萬分一に玉山浦とかいてあつて漢字と其傍訓がどうしても一致しないから、里人に先づ此の傍訓の如くに此處を通稱するのを確めた上で次にそれに對する漢字を聞いて見た處、新稱の方の漢字は知つては居るが通稱に對する漢字は知らなかつた。今の五萬分一圖ではこゝは馬山里とかいてある。此等の例は忙しい調査旅行の間に偶然に氣付いたものに過ぎないので少し調べたならばかゝる不思議の例は幾らもあることと思ふ。何れも地名變更の多かつたのを裏書きするものである。

公稱の里名や洞名が地方人に通用しないのが甚だ多いから其場所へゆくまでは公稱の洞里名では通用しないことがある。婦女子の如きになると自家の門牌(表札)に書き表はしてある里名は全然知らぬ者が多い、唯俗稱を覺えて居るのみで字は無論知らない。かういふ風であるがら一地方の地圖には公稱里洞名以外の小地名又は幾つかの里洞を併せた總名に俗稱を掲げる必要があるが、こんな地圖は郷土誌研究者の手を待たなければ出來うべくもないことである。

一體地名を基として地形や生業を解釋するには成可く小さな集落とか小澤とかに附けた名を用ふ

ることが必要である。國だとか郡だとか云ふ名を採つては充分な効果がないもので、外國の地名考説の書物にしても各國の名の様なあまりに大きな地名をのみ取扱つたものは地理學的眞髓に觸れて居ない。朝鮮に就いて云へば行政區劃の里洞名でも其一部は無意味に漢字を結びつけたもので地理的事實を示さない、それ故もつと小さな地名が必要である。公稱里洞の下の小洞名は五萬分一地形圖には可成多いが猶不足して居る。山間の溪谷で人家が數戸ある様な場所は人家も現はされて居ないと同時に洞名も書かれて居ない。こんな洞名にかなり面白いものが多い。又朝鮮には山の名は多くなくて、著しいものゝ外は無名のが多いが、小澤でも谷には必ず名が附いて居る。——日本でも澤には大抵名があることは同様である。——谷の名は甚だ地名考説に重要である。部落の名にしても最初は谷の名から起つたものが甚だ多いと思へる。地籍の方では小地名の洞名の下に何々員とか何々坪とかの最小地名を用ひたり、山地であるとか何々嶺とつけて小別する。而して小地名は變改されない、洞里名は變へられても小さな集落の名、殊に小澤の名は決して變へられることがなくて殆んど永久に言ひ傳へられる。尤も轉訛はあるので名はあつても其の意義が其土地の人から忘れられて了つたものが甚だ多い。面白い小地名の字も意義も土地の者からは聞くことが出來ないで、却つて我々の様な朝鮮語の素養に乏しい者の專擅な解釋に委かして居る有様である。

朝鮮の地名を集めた書籍の二三を舉げて見ると、朝鮮總督府で地方行政區域名稱一覽といふのを

時々出版した。之は公稱の里洞名までを舉げたもので、昨大正十三年六月一日現在のものが最も新しい。正誤表はついて居るが之にも漏れた誤植がなほ少くないのは遺憾である。同じ名稱一覽で明治四十五年一月一日現在のものは郡面里の廢合が大規模に行はれる前のものである爲めに、小地名に富んで居るから地名考説には役立つことが多い。民間で出たものには越智氏編、新舊對照朝鮮全道府郡面里洞名稱一覽と云ふのがある。大正二年に大に改廢され其後も異動のあつた地名を大正六年四月現在によつて編輯したもので如何に舊地名が新地名に移つたかを示して居る。此の他道廳から出版した地名表も見たいことがあるが、大正二年に咸鏡南道を旅行した時に其の中の一つの里名が其の面に行つて憲兵にも土地の人にも尋ねて終にそんな地名のないと云ふことが判つた經驗もある。猶朝鮮地名の讀み方についてはサトウの朝鮮地名表と小藤金澤兩博士の朝鮮地名字彙がある。露西亞のウエーベルは朝鮮郡邑名の外國字に書き直し方について露西亞の地理學會の雜誌にかいたさうである。ゲールの韓英字典には重なる場所が掲げてあつて位置が記述されて居る。之等の内小藤金澤兩博士の地名字彙の序説中の地形語の表は朝鮮地名考説に甚だ役立つものである。

朝鮮の地名を取扱ふ場合に最も重要なことは朝鮮の地名に訓讀されるものと音讀されるものがあることである。小地名の多くは訓讀され又は音訓を混じて居ることもある。行政區劃の名は音讀される場合が多い。表でだつて云ふ時は音讀するが一般には訓讀されるものが少くない。一般に小

地名でなくてもかなり大きな集落の名が一般の人達からは訓讀される例も少くない。例へば大田を朝鮮人は訓讀してハンバと云ひ、裡里をソムニーと云ふ類で馴れない鐵道の出札係にソムニーと云つて乗車券を容易に買へなかつた氣の毒な朝鮮人を見たことがあつた。之等の驛名は諺文で示してある驛名でも音讀してテイジョン及イーリーとかいてあつて、結局は音訓の兩様の讀方が行はれてゐるのである。

かく音讀では通じないと云ふことは地名は先にあつて後から漢字が宛て籍められたのであるからである。實際日本にしても宛字の地名が多い、此事は地名に關して東洋共通で、地名考説を一層複雑困難にする原因となる。この意味で地名の上では漢字は象形文字ではなくて音韻文字であると思へる。地名に附けた漢字は萬葉假名であると思へばよいのである。日本の地名でもさうであるが地名考説に當つて文字に拘泥するのは禁物である。殊に地名では美しい、佳き意味の文字を假用することが普通である。種々の宛字を用ひてある一例を舉げて見ると咸鏡南北道には、アルカリ石英粗面岩(コメンダイト)と云ふ特種の火山岩から出來た圓く突起した山が多いが、こんな山峯に圓峰(トュルンボンク)と云ふ名が附けられて居る。地圖を見ると杜陵峯、頭雲峰等とかゝれた同様な頭の圓い山がある。これ等は宛字であつてたゞ字から見ると圓いと云ふ意義が一つも現はされてゐないが、宛字に左右されて元の圓いと云ふ意義を没却してはならない。

美しい佳き意味の字を地名に附けたがると述べたが朝鮮の地名には我々から見てもさくさくしい、又は滑稽なものも少からずある。陋巷里、蠅頭里、道化里、腐橋里、長尿里、多食洞などは随分馬鹿げて居る地名である。

地名の研究は甚だ煩雜な仕事であるが、然かも其の結果は往々牽強附會に陥つて眉唾の物になり易い。然し朝鮮の文物は日本のそれに比してより簡樸で、地名には能く地形又は地理上の位置を示したもののや、人文の状態例へば其の土地の主な生業を現はしたものが少くない、茲に述べるのは通常地名考説で行つて居る様に行政、地形、民居、生業等を現はす語辭を地名中より選拔し來つて其の説明をし、無理な地名解釋を成可く避けたいつもりである。

朝鮮地名の史的研究は甚だ興味ある問題で、殊に日本地名との關係は研究に價あるものである。既に宮崎博士や金澤博士が言語學上よりした研究がある。——金澤博士のは日鮮古代地名の研究と題された——こゝで述べる主要な目的は地名の地理的説明を試みながら、地名によつて朝鮮の自然及人文地理一斑を窺はんとするのであつて間々古代地名のことも交へて見たいと思ふ。

朝鮮地名に關して現在必要な事項は地名考説の他に我等が朝鮮の地名を如何に讀むべきかの問題である。既に遞信の方面では日本讀みを用ひて居る。朝鮮の地方に在住する日本人はある地名は日本讀みにし、ある地名は朝鮮讀みにして居るが其の何れも不完全な讀み方であることが少くない。

地名の讀方は統治行政の上にも關係があることであるから一定したいものである。現に測量部で製圖出版しつゝある百萬分一萬國圖調製の作業が進んで朝鮮を出すときに如何に朝鮮の地名を歐字化するかは考量をしなければならぬ大切な事柄である。全然朝鮮讀みにすることは今の日本として行へぬことである。反對に全然日本化することも種々の點から好ましいものではない。現に光州、公州、黃州、廣州の如きは普通の日本讀みにすると全く同じに聞える。十數年前には轉任の辭令を電報で受けて同音なるが爲めに全く違つた處に赴任して了つた憲兵があつたと聞いた。又京城をキョウゼウと話された内地の人があつた爲に私はすぐそれを鏡城と思つて頓珍漢の答をしたことがあつた。それで主義としては朝鮮發音に近い日本讀みを用ふことがよいと思ふ。この問題は別に考究した所を論述しやうと考へるから茲では只其の一端を序に述べたまでである。

以下各論として行政區劃及施設に關する地名、地形に關する地名、民居に關する地名、生業に關する地名に大別して地名考說の一般を述べて見やう。(未完)